2019 年 5 月 31 日

平城宮第一次大極殿院地区の発掘調査（平城第 612 次）記者発表資料

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所都城発掘調査部

調 査 地：特別史跡平城宮跡 第一次大極殿院地区
調査期間：2019 年 4 月 8 日～継続中
調査面積：400 ㎡（東西 16m、南北 25m。うち 16 ㎡は既調査区との重複部分）

概　要

〇平安時代初頭の掘立柱塀１条と南北溝２条が見つかりました。これまでの調査でも確認しており、平城太上天皇（へいぜいだいじょうてんのう）の住まいの東辺を区画する塀とそれにともなう排水溝と考えられます。

※現地説明会を６月７日（金）に開催します（11 時開始、15 時終了）。
説明は順次おこないます。（少雨決行）

１．平城宮第一次大極殿院地区の調査

奈良文化財研究所では、1959 年以来、継続的に第一次大極殿院地区の発掘調査をおこなってきました。これまでの調査成果から、第一次大極殿院地区の遺構は、大きく３つの時期に分かれることが明らかになっています（図３）。

Ⅰ期：奈良時代前半（第一次大極殿院の時期）
東西約 180m、南北約 320mの範囲を築地回廊で囲み、北に大極殿を建て、その南を礫敷の広場とします。現在、南門の復原整備が進められています。

Ⅱ期：奈良時代後半（称徳天皇の西宮の時期）
南北幅を狭めて内裏と同規模の区画（東西約 180m、南北約 190m）をつくり、区画内の北半分に多数の掘立柱建物を建てます。

Ⅲ期：平安時代初期（平城太上天皇の西宮の時期）
Ⅱ期とほぼ同じ場所に区画施設をつくり、その内側に多数の掘立柱建物を建てます。また、区画の外側にさらに塀（外郭塀）をめぐらせます。

今回の調査は、国土交通省による第一次大極殿院の復原整備にともなうものです。調査地は、奈良時代には、第一次大極殿や西宮の東面を区画する施設の東側にあたり、平安時代初頭には、平城太上天皇の西宮の東外郭塀が想定される場所です。

２．調査の成果

（１）検出した遺構

今回の調査では、平安時代初頭の塀１条と溝２条を検出しました（図４）。奈良時代の遺構は確認できませんでした。

南北塀１　調査区の西部で検出した掘立柱塀。柱穴 10 基、柱間９間分を検出しました。北と南はさらに調査区外へ続きます。柱穴の多くは、掘方が一辺約 50 ㎝の隅丸方形ないし円形をしています。柱間寸法は 1.9～2.7m（6.5～９尺）です。

なお、これまでの調査成果から、塀は全長約 235m で、今回の調査区北端から約 110m北で推定大膳職地区の東を限る築地塀に取りつき、今回の調査区南端から約 100m南で西に折れることが判明しています。

南北溝１　調査区の西辺で検出した、北から南へ流れる素掘溝。幅約１m、深さ約 35㎝で、長さ約 23m分を検出しました。北と南はさらに調査区外へ続きます。南北塀１の西側の排水溝と考えられます。

南北溝２　調査区の中央やや西寄りで検出した、北から南へ流れる素掘溝。幅約１m、深さ約 20 ㎝で、長さ約 23m分を検出しました。北と南はさらに調査区外へ続きます。南北塀１の東側の排水溝と考えられます。

（２）出土した遺物

奈良時代の瓦や、古代から近代までの土器・陶磁器類が少量出土しています。また、第一次大極殿院で用いられたとみられる鬼瓦片や、平安時代前半の土器が見つかっています。

３．まとめ

○平安時代初頭の掘立柱塀１条と南北溝２条を、約 23mにわたって検出しました。これまでの調査でも確認している遺構で、平城太上天皇の住まいの東辺を区画する塀とそれにともなう排水溝と考えられます。

○奈良時代の遺構は確認できないことから、第一次大極殿院や称徳天皇の西宮の東側は、空閑地として保たれ続けた可能性が高いことを再確認しました。

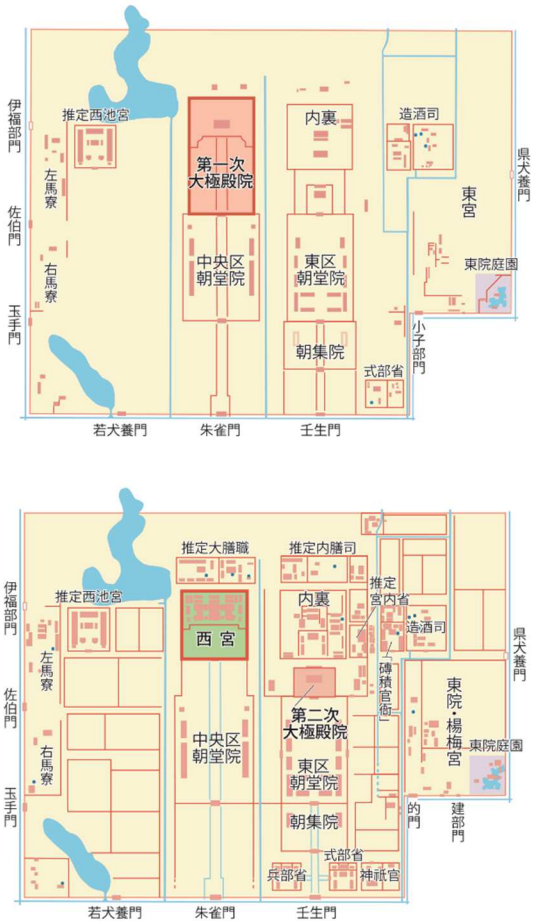


図１　平城宮（上：奈良時代前半、下：後半）

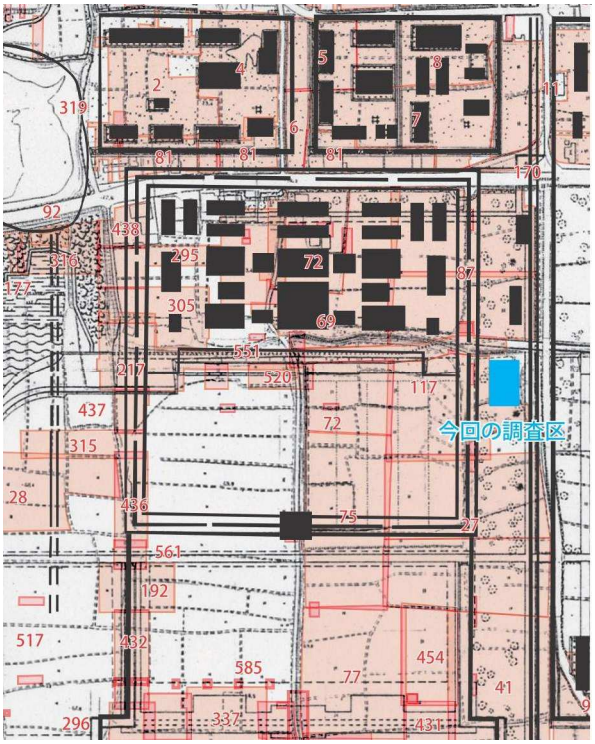
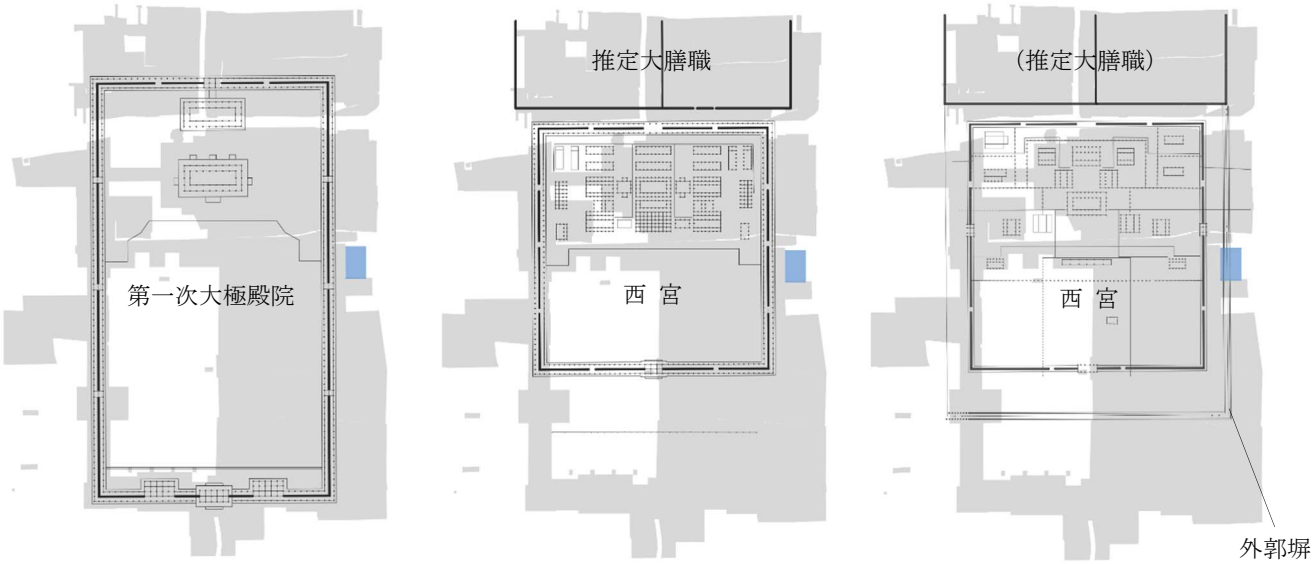


図２　調査区の位置



Ⅰ－２期（奈良時代前半）
第一次大極殿院

Ⅱ期（奈良時代後半）
称徳天皇の西宮

Ⅲ期（平安時代初頭）
平城太上天皇の西宮

図３　第一次大極殿院地区の変遷（灰色：既調査区、青色：今回の調査区）

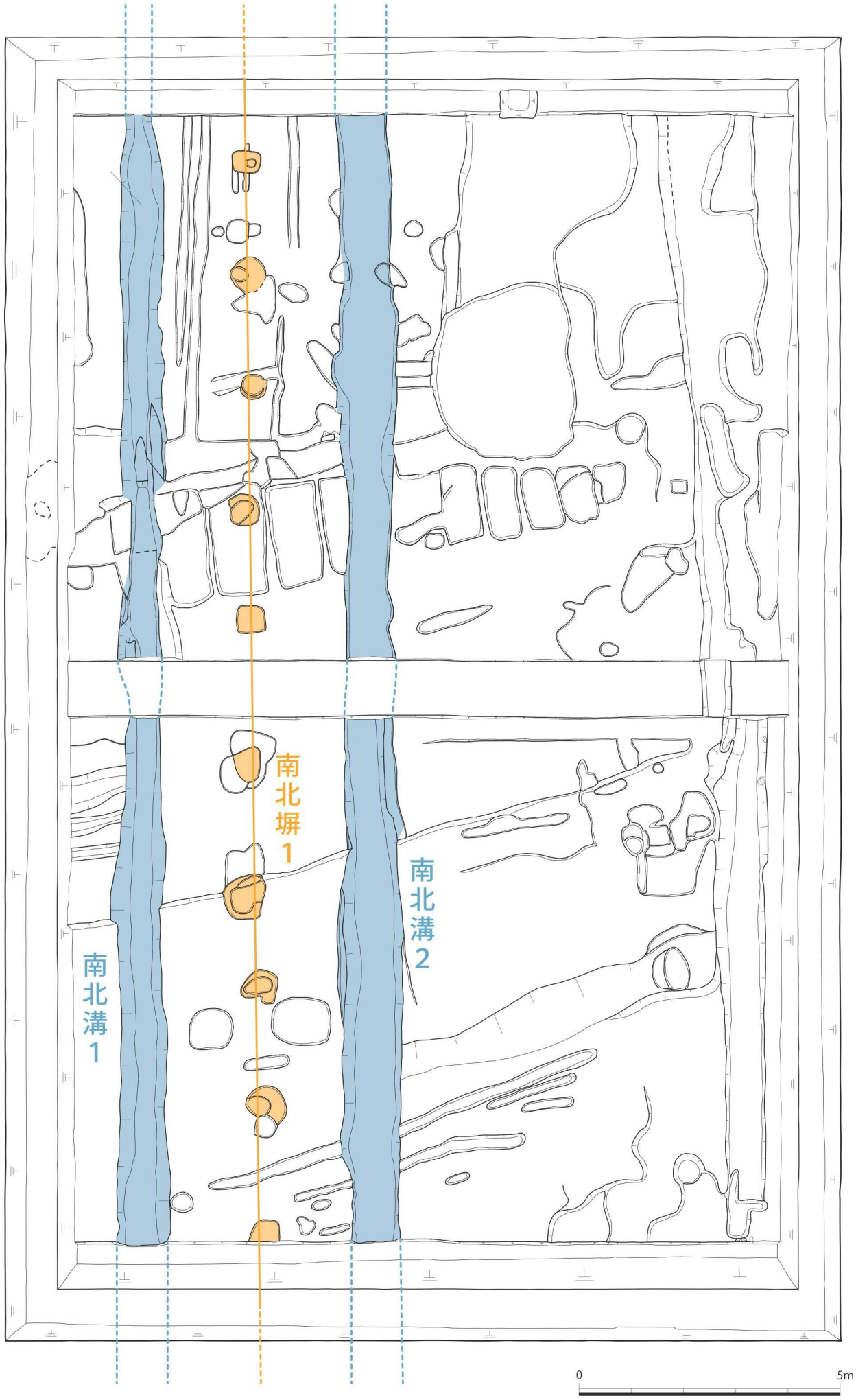


図４　平城第 612 次調査 遺構平面図（S=1/100）